

死後の世界 第一部 死とは何か 第2章 死についての聖書的理解 ①

この学び全体のアウトラインと本日の内容

第一部 死とは何か

第1章 人の構造

第2章 死についての聖書的理解

第3章 非物質的部分【霊魂】の不滅

第二部 人は死んだら、どこへ行くのか

第1章 肉体の死後、人の霊魂はどこへ行くのか

第2章 復活までの中間的状态

第三部 死者の復活

第1章 教会の携挙【新約時代の信者の復活】

第2章 大患難期の後の75日間【旧約時代の信者と大患難期の殉教者たちの復活】

第3章 メシアの王国【信者は肉体の死を経ずに全員が変換】

第4章 王国の後【不信者の（第二の）復活、不信者は第二の死へ】

第四部 新しい天と新しい地での永遠の生活

前回までの5回をかけて、第一部 第1章 「人の構造」を学びました。今回から、第一部第2章「死についての聖書的理解」に入ります。聖書は、死について、どのように教えているか、これが第2章のテーマです。

本論に入る前に、これまでの内容の中から死後の世界を理解する上で重要なポイントを簡単に振り返ります。

1. 人は物質的部分である「からだ」と、非物質的部分である「霊魂」から成る。
2. 非物質的部分には、霊・魂・心・思考・意志・良心の6つの要素と、これらに加えて、人が墮落したときに入った罪の性質である「肉」、全部で7つの要素から成る。
3. 霊・魂・心・思考・意志・良心の6つの要素は互いに重なり合うところもあり、それらが一体となって人の霊魂を形成している。
4. 人が神の恵みにより信仰を通して救われるとき、その人の霊魂には、新しい性質が入る。
 - (1) この新しい性質は、「霊」と呼ばれる。よって、「霊」は、非物質的部分の6つの要素の一つである「霊」を指す場合と、新しい性質を指す場合がある。
 - (2) 信者の中では、霊・魂・心・思考・意志・良心の6つの要素が、新しい性質によって影響を受けて、新しくされる。
5. 「肉」は、物質的部分である「からだ」を指す場合と、罪の性質を指す場合の両方で使われる。
 - (1) 罪の性質である「肉」は、人の非物質的部分【霊魂】の中に住んでいて、霊魂の中の他の6つの要素すべてに影響を及ぼしている。

- (2) 罪の性質である「肉」は、完全に悪いものであって、新たにされる対象ではない。
- ① 信者になると、他の 6 つの要素はすべて新しくされる。肉だけは、新しくされる対象ではない。
 - ② 信者の義務は、罪の性質である肉を改善したり、肉をなくそうとすることではない。肉に従わずに、新しい性質である霊に従っていくことである。できなかったときは、I ヨハネ 1:9 の告白の祈りをする。すると清められて、神との交わりが回復され、力が供給されて霊の戦いに再び立つことができる。その繰り返しの中で、鍛えられ、訓練されて、成長していく。
 - ③ 肉は、死のときに、消去される。信者が身体的に死ぬとき、その人の非物質的部分【霊魂】から「肉」という要素は永久になくなる。そして、信者の霊魂は、他の 6 つの要素を永遠に持ち続ける。
 - ④ 教会の携挙のときに地上で生き残っている信者は、一瞬のうちに身体が「栄光のからだ」に変換される。そのとき、その人の非物質的部分【霊魂】から、「肉」という要素は消去される。
 - ⑤ 地上での生涯において、人の霊魂は「肉」を含む 7 つの要素を持っている。しかし信者には、将来必ず、肉が消去されて、6 つの要素に戻る日が来る。それは、その人の身体的な死のときか、携挙で体に変換されるとき、である。

「死についての聖書的理解」のアウトライン

- | | | |
|----------------|---|--------|
| 1. 死の起源 | } | 今回 ①前半 |
| 2. 死の意味 | | |
| 3. 肉体の死 | | |
| 4. 霊的な死 | | |
| 5. 永遠の死 (第二の死) | | |
| 6. メシアの死とそのみわざ | } | 次回 ②後半 |
| 7. 死と信者 | | |
| 8. 死を滅ぼす | | |
| 9. 結論 | | |

本日の内容 死についての聖書的理解 ①

1. 死の起源
 - (1) 聖書は次のことを教えている
 - ① 死には 3 つのタイプがある
 - ② 3 つとも、すべて、その起源は、人の墮落である
 - (2) 死の 3 つのタイプとは
 - ① 肉体の死
 - ② 霊的な死

③ 永遠の死

(3) 死は、墮落の直接的な結果である。そして、死は、罰として用いられる悪である。

① 創 2 : 16~17

② 創 3 : 19

③ エゼ 18 : 4

④ ロマ 5 : 12

⑤ ロマ 6 : 23

⑥ I コリ 15 : 22

2. 死の意味

(1) 聖書が教える「死」の意味を最も簡潔に表すなら、それは「分離」である

(2) 死は、「存在しなくなる」ことでも、「意識がなくなる」ことでもない。

(3) 人は死んだのちも、その存在は続き、意識も続く。→ 実例 金持ちとラザロの話 (ルカ 16 : 19~31)

- これは例え話ではない。例え話では、人の実名は出ない。
- この話は実話。3人の死者が登場する。金持ち、ラザロ、アブラハム。
- 彼らの間では、会話がある。意識がある。痛みや悲しみの感情がある。
- よって、死は、存在や意識がなくなることではない。

(4) 死の本質的な意味は、分離である。そのことを、3つの死のタイプを学ぶ中で見る。

3. 肉体の死

(1) 肉体の死とは、人の非物質的部分「靈魂」が物質的部分「からだ」から分離することである (伝道 12 : 7、ヤコブ 2 : 26)。

(2) 肉体の死は、特に、罪に対する罰である (創 3 : 19、民 27 : 3、詩 90 : 7~10、ロマ 5 : 12~21、6 : 23、I コリ 15 : 21~22)。創世記 5 章には「そして彼は死んだ」という記録が何代も繰り返される、例外はエノクだけである (創 5 : 21~24)

(3) しかし、信者にとって死は、もはや罰ではなくなる。むしろ、天に入るための手段である。

① 信者の死について、聖書は、「眠る」という用語を用いている (I テサ 4 : 13~14「イエスにあって眠った人々」)

② 聖書が「眠る」という用語を使うとき、魂が眠っているという意味ではなく、からだ眠っているという意味で使っている。

- からだが眠っているとき、身体的な活動は一時的に停止しているが、靈魂の活動は休止していない。思考は働き続けている。からだの諸器官すら、たとえば心臓や脳など生命維持に不可欠な臓器は動き続けている。
- このように、からだが眠るというのは、眠りから覚めるまでの間、一時的に身体活動の一部が休止することである。
- 信者の死を「眠る」と表現する場合も同じで、身体的な活動が一時的に休止していることを指している。霊、魂、心、思考、意志、良心、これら 6 つの要素の活動は止まってはいない。死とは、その人の存在が消滅

するとか、意識が無くなる、というわけではない。

- ③ 信者にとっては、死はもはや罰ではない。それは、天に入るための手段である。死ぬことを「眠る」と表現するように、霊魂が天に入って、身体的な活動は一時的に休止するが、それは、来るべき日にその人のからだが目覚め、復活するまでの間のことである。
- (4) 肉体の死に対する解決策は、からだの復活である。からだの復活により、からだと霊魂が分離していた状況が解消され、再び両者が合体することになる（ロマ 5：17、I コリ 15：22）

4. 霊的な死

- (1) 霊的な死とは、神から時限的に分離することである（マタ 8：22、ヨハ 5：24、8：51、エペ 2：1、5、5：14）
- ① 霊的な死とは、「人の『霊』が死んでいて、全く動いていない」ということではない。
- 信者だけでなく、すべての人が霊をもっていて、その霊は活動している（I コリ 2：11）
 - その霊がからだを離れると、肉体の死となる（ヤコ 2：26）
- ② 6つの要素を個別に学んだ中で、霊と魂の違いについて扱った。魂が地上的なことや肉体との関係を強調するのに対し、霊は天上のことや神との関係を強調する点にある。霊的な死とは、神との関係において分離されている状態を表現している。
- (2) 霊的な死も、肉体の死と同様、罪に対する罰である。創 2：17によれば、神はアダムにこのように警告した。「この命令に従わないなら、あなたは必ず死ぬ」。アダムが罪に堕ちたその日、彼は肉体の死を経験しなかったことは明らかである。しかし、彼はその日、確かに霊的に死んだ。アダムとエバが罪を犯したとき、彼らは神に対して死んだ。
- (3) 彼らの性質が、神の性質とは反するものになったのは、墮落したからであった。それによって、墮落前にもっていた神との交わりのレベルには、もはや手が届かなくなった。そして、アダム以降の子孫たちも、霊的に死んだ状態で生まれてくる。
- (4) I コリ 2：14「生まれながらの人（直訳すると、魂的な人）」は、霊的な死人である。もちろん、生まれながらの人は、自分が霊的に死んでいるとは自覚していないし、神から分離されているとも感じない。それはちょうど、死者の遺体が、自分は死んでいると感じることはできないのと同様である。生まれながらの人は、自分が神から分離されているとは感じないのである。しかし、確かにその人は神から分離されている。
- (5) 霊的な死に対する解決策は、メシアにあって信仰によってよみがえらせられ、生きる者とされることである（ヨハ 5：24、エペ 2：5～6、コロ 2：13）

5. 永遠の死、または第二の死

- (1) 永遠の死とは、神からの永遠の分離である（黙 20：11～15、21：8、マタ 10：28、25：41、Ⅱテサ 1：9、ユダ 13「真つ暗なやみ」、黙 14：10～11）
- (2) 霊的な死は神からの時限的な分離であったが、永遠の死は神から分離された状態が永久に続き、終わることがない。これは、滅びの場所である。
- (3) 永遠の死は、メシアを自分の救い主として信じることをしなかったことの結果である（ヨハ 3：17～18、8：24、使 4：12）
- (4) 永遠の死の場所、すなわち、分離された人々が永久にそこにいることになる場所は、火の池である（黙 20：11～15、21：8）
- (5) 永遠の死に対する解決策は、ない。なぜなら、永遠の死は、サタンと悪霊が発生したという問題に対する神の解決策だからである（マタ 25：41）。サタンと悪霊には救いがないのと同様、サタンと悪霊と同じ場所に行った不信者たちにも、もはや救いはない。ただし、火の池でのさばきには軽重がある（黙 20：12「自分の行いに応じて」）

6. メシアの死とそのみわざ

- (1) 広い意味での復活（よみがえり）には、2つのタイプがある
 - ① 蘇生＝身体的ないのちを回復すること
 - 旧約では2例 Ⅱ列 4：32～37、Ⅱ列 13：20～21
 - 新約では少なくとも4例 マタ 9：18～26（マコ 5：21～24、ルカ 8：40～42、49～56）、ルカ 7：11～17、ヨハ 11：1～44、マタ 27：52～53）
 - これらの人々は、身体的ないのちを回復しただけであり、その後、彼らは再び死んだ。
 - ② 狭い意味での復活＝真の復活のいのちを受けること
 - もはや死ぬことのない、復活のいのちを受ける（ロマ 6：9）
 - 復活させられたからだの性質は、元のからだの性質とは変わっている。身体的には死ぬことのできない、からだである。
 - 現時点では、このような復活を経験したのは、イエスおひとりである。それゆえ、「復活の初穂」（Ⅰコリ 15：23、コロ 1：15、18、黙 1：5）
 - ヘブ 2：14「その死によって」＝その死を通過して→イエスは死を通過した
 - 蘇生の場合は、死を通過していない。身体的ないのちから身体的な死に移り、そこから身体的ないのちに戻っただけである。
 - イエスは単に死から戻ったのではなく、死を通り抜けた。身体的いのちから身体的な死へ行き、そこから戻ったのではなく、死を通り抜けて、その向こうへ進み、復活のいのちに到達した。
- (2) メシアが死んだその死の種類は2つ
 - ① 霊的な死・・・十字架上の後半の3時間、地上が暗黒に包まれた時間。その暗黒は、メシアが父なる神から分離されて霊的な死を経験していたことの象

徴。このとき、世の罪はメシアなるイエスの上に置かれた。このとき、父なる神はメシアから顔をそむけた。父なる神と、人としてのイエスとの間に分離があった。この3時間、イエスは霊的に死んだ。

- イエスは、神であり人であるお方。彼はひとりの人格でありながら、神としての性質と人としての性質を兼ね備えたお方であった。
- 神の性質においては、父なる神と子なる神との間にはひとときの分離もない。父なる神との交わりは、終わることなく、妨げられることなく、常に存在する。
- しかし、人の性質においては、十字架上で3時間の分離が起きた。このとき、イエスは霊的に死んだ。
- 後半3時間の最後に、イエスは叫んだ「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」イエスは、霊的に死んでいた（マタ 27:45～46、マコ 15:33～34）。
- その次に、イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます」（ルカ 23:46）・・・「父よ」と呼びかけたこの時点では分離状態ではない。霊的死から復活したことを示す。

② 肉体の死（マタ 27:50、マコ 15:37、ルカ 23:46、ヨハ 19:30）

- マタ 27:50 そのとき、イエスはもう一度大声で叫んで、息を引き取られた（霊ギプニューマを解き放たれたギアフィエイミ）
- ルカ 23:46 イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られたギエクプネオウ【息を吐きだす、霊を放つ】
- ヨハネ 19:30b そして頭をたれて、霊をお渡しになったギパラディドゥミ【差し出す】・・・死んで、がくりと頭が下がったのではない。意識的に頭をたれて、それから霊を差し出した。イエスの霊が体から離れた、これは肉体の死である。

③ 肉体の死は、罪の贖いのために必要であった。これに対して霊的な死は、贖いのためではなく、私たちに同情できる大祭司となるために必要であった（ヘブ 2:17～18）

④ イエスは、十字架上で、霊的な死と肉体の死との両方を死んでくださった。そして、死を通り抜けて復活のいのちに到達した。このときイエスは、信者にとっての死の意味を変えた。

- そのことを次回、「死と信者」において、学びます。

イエスの十字架から埋葬までの30の段階（「メシアの生涯」第4巻より）

（□は、十字架上での7つのことば）

1. メシアは十字架を背負う（ヨハネ 19：17）
2. クレネ人シモンが十字架を負わされる（マルコ 15：21）
3. エルサレムへの嘆き（ルカ 23：27～31）
4. ゴルゴタへの到着（マルコ 15：22）
5. 苦味と没薬を混ぜたぶどう酒をなめただけで、飲まず（マルコ 15：23、マタイ 27：34）
6. 十字架に釘付けられる（マルコ 15：24～25）
7. □第一のことば（ルカ 23：34）「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」 彼ら＝ローマ兵たち
8. イエスの上着を分ける（ヨハネ 19：23～25a）
9. 罪状書き（ヨハネ 19：19～22）
10. 他に二人が十字架刑に（マタイ 27：38）
11. 5回目の嘲り（あざけり）（マルコ 15：29～30）
12. 6回目の嘲り（マルコ 15：31～32）
13. 7回目の嘲り（ルカ 23：36～37）
14. 8回目の嘲り（マタイ 27：44）
15. 犯罪人のひとりの回心（ルカ 23：39～42）
16. □第二のことば（ルカ 23：43）「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」
17. □第三のことば（ヨハネ 19：25b～27） 母マリヤと弟子のヨハネに
18. 全地を覆う暗黒（ルカ 23：44～45a）12時から3時
19. □第四のことば（マタイ 27：46） 3時頃、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」
20. そこに立っていた人々の反応（マタイ 27：47～49）
21. □第五のことば（ヨハネ 19：28）すべてのことが完了したのを知って、聖書が成就するために言われた。「わたしは、渴く」 →詩 22：15
22. 酸いぶどう酒を飲む（ヨハネ 19：29）
23. □第六のことば（ヨハネ 19：30）「完了した」
24. □第七のことば（ルカ 23：46）「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」
25. イエスの死（マタイ 27：50、マルコ 15：37、ルカ 23：46、ヨハネ 19：30）
26. 地震、死者の蘇生、神殿の幕が裂ける（マタイ 27：51～53、マルコ 15：38）
27. 他の二人は足のすねの骨を折られ、イエスは槍で突き刺される（ヨハネ 19：31～37）
28. 遺体下げ渡しの願い（マタイ 27：57～58、マルコ 15：42～45、ルカ 23：50～52、ヨハネ 19：38）
29. 遺体を十字架から降ろす（マタイ 27：59a、マルコ 15：46a、ルカ 23：53a、ヨハネ 19：38b～40）
30. イエスの埋葬（マタイ 27：59b、マルコ 15：46b、ルカ 23：53b、ヨハネ 19：41～42）
「亜麻布（複数形）で巻いた」＝細長い形状の布を何本か使って巻いた）